

# 江戸庶民の地藏信仰

# 香取遺産

Vol. 55



▲単制の石幢（西和田地区）

▲重制の石幢（大角地区）

お寺や墓地などで、石灯籠に似た石造物を見かけたことがあるでしょうか。火を灯す火袋がなく、火袋にあたる所には地藏像が彫られていることから、灯籠ではないことがわかります。

これは、石幢と呼ばれる供養塔で、鎌倉時代から江戸時代にかけて造立されたものです。石幢の起源は、仏堂の中で吊り下げられる幢幡と呼ばれる布製の荘嚴具を石で模したもので、中国の隋・唐時代に流行しました。我が国には平安時代末期に伝わり、經典を保存・埋納した標識として立てられました。中世になると地藏信仰と結びついて、六地藏石幢として全国各地に広まります。

人間を含めてすべての生命は、地獄道・餓鬼道・畜生道・修羅道・人間道・天上道

の6つの世界に生まれ変わりを繰り返すという六道輪廻の思想があります。地藏菩薩は、六道を巡って迷い苦しむ衆生を救済し、極楽へ導いてくれると信じられたことから、地藏菩薩の6つの分身が考えられるようになります。これを六地藏といいます。今でも、墓地やお寺の入口などで6体のお地藏さんが並んでいるのをよく目にします。

六地藏石幢には、大きく分けて、重制と単制の2種があります。重制のものは基礎の上に竿を立てて中台を置き、その上に龕・笠・宝珠をのせます。単制のものは竿と中台がなく、基礎の上に幢身を立て、その上に笠と宝珠をのせています。重制では龕部、単

制では幢身が六角形に整形されていますが、四面に地藏像が彫られています。四角形や八角形の

ものもあります。地藏像は、浮き彫りや線刻、梵字などで表されます。また、竿部に輪廻車を取り付けたものも見られます。

現在のところ市内で最も古い石幢は、新市場地区にある天正2年（1574）のものですが、多くは江戸時代に造立されたものです。その目的は故人の追善供養や自身の逆修供養（生前から死後の冥福を祈って仏事を行うこと）で、江戸時代中期ごろには念仏や月待・日待といった講で立てられたものが多くなります。江戸時代は、さまざまな民間信仰が盛んで、多種多様の石造物が造立されました。六地藏石幢は、このような江戸庶民の信仰を今に伝える資料の一つといえます。

問い合わせ  
生涯学習課 1224